

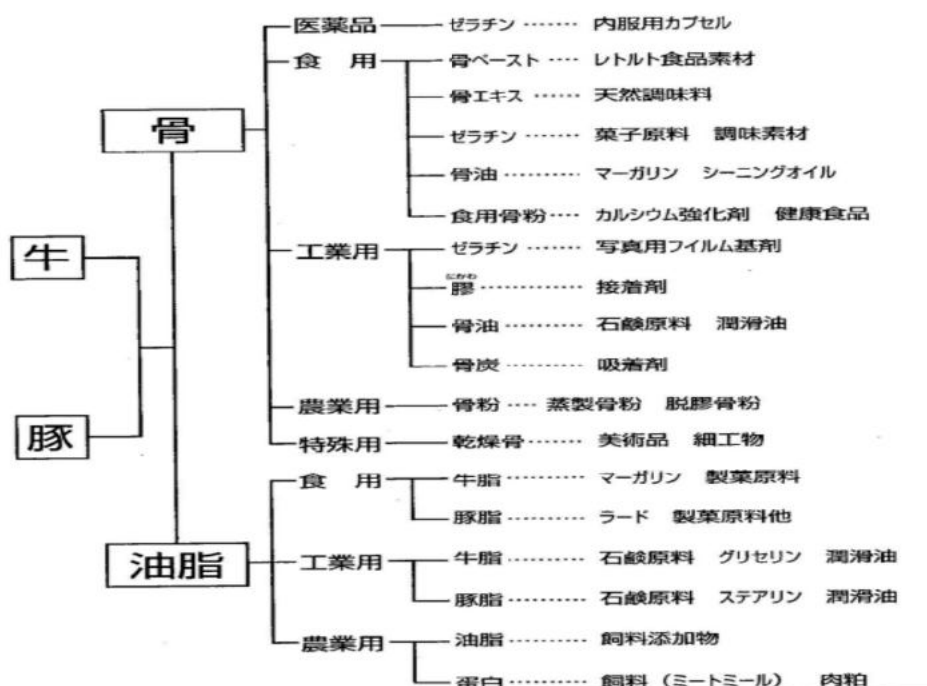
## 西成のまちづくりとレンダリング産業

レンダリングは、日本では「化製業」といわれています。1875年(明治8)、京都府に提出された「斃牛馬化製法」(『京都の部落史』十巻)という書類が残っており、これが“化製”という言葉を使ったかなり早い時期の例ではないかといわれています。この翌年に、京都のお医者さんが、死んだ牛馬の有効活用の方法を具体的に書き上げた「斃牛馬化製法書」(京都府立総合資料館蔵)を作成しています。

“レンダリングは化製業”。肥料や膠(ニカワ)、食料原材などとして再生していく仕事で、食肉産業の静脈産業であるとともに、屠畜業の周辺産業として成立してきた経緯があります。

化製業は、牛や豚の骨や脂を加工処理する仕事を言います。レンダリングは化製業に携わる業界の連合会がつけた新しい呼称で、「レンダリング」といえば、化製業全般を指し、食肉の加工過程で排出、廃棄される「骨」を処理し、骨粉、エキス、油脂などに分解し、肥料や膠(ニカワ)、食料原材などとして再生していく仕事です。食肉産業の静脈産業であるとともに、屠畜業の周辺産業として成立してきた経緯があります。これは、原料となる牛骨の供給場所が主に屠畜場に限られるといった状況があったからといわれています。日本の肉食の習慣が歴史的にも浅く、食肉の供給の方に重点がおかれ、骨など不可食物の処理に関しては施策がおざなりにされてきたというのが実状でした。屠畜場で「廃棄物」として発生する牛脂や牛骨や豚脂の処理は一手に化製業者、つまりレンダリング業者に委ねられてきました。

図. 牛、豚の骨・脂の有効利用の用途



## 明治後半期から交通の発達に伴い、市街地化が一段と進展。そして大正期驚異的な発展を遂げた

明治の中期ごろ、現在の関西線、南海本線、高野線、阪堺線などが次々と開通し、後半期には市街地化が一段と進展しました。この交通の発達に伴い、有利な地理的な条件が整った今宮村は、相次いで工場が建設されました。電光社、日本防水布工場、桑田商会工場、岩崎製鉄第1工場、旭防水布工場…。津守村にも尼崎紡績津守工場、津守煉瓦製作所等が建設されました。特に津守村の尼崎紡績工場は近代的な工場であったため、村の発展に大きな影響を与えた。さらに大正時代にはいと、驚異的な発展を遂げています。

図. 大正時代津守新田にあった大日本紡績株式会社津守工場

現在の西成高校付近。大正から昭和にかけて田畑の中に家が建ちはじめた



出典：焼土の街から

西成地区のレンダリング産業は、屠場の誕生とともに周辺産業の一つとして発生しています。1910年(明治43年)7月に今宮村は当時の金で19,900余円の費用を投じ、約800坪の敷地に215坪の「今宮村営屠場」を開設、年々世間の肉の需要が高まったこともあって多額の純益を生み、翌年に村費で常設家畜市場が開設しています。

かって今宮村には個人の営利事業として大阪屠場株式会社がありました。ところが、1906年(明治39年)の屠場法発布によって屠場は市町村に経営させることが決められ、このため、1910年(明治43)7月に今宮村は当時の金で19,900余円の費用を投じ、約800坪の敷地に215坪の「今宮村営屠場」を開設しました。この屠場開設後、年々世間の肉の需要が高まったこともあって多額の純益を生み、村の財政に寄与し、1911年(明治44)には村費で家畜市場を設置することを村会で決定し、1913年(大正2)には村内の元木津に村営の常設家畜市場が開設されています。この屠場は1939

年(昭和 14)になると建物が老朽化、しかも狭いために津守に移転、さらに南港に移っています。

西成地区のレンダリング産業は、屠場の誕生とともに周辺産業の一つとして発生しています。戦前までは 7~8 軒のレンダリング業者が存在し、活況を呈していましたが、戦時中企業統合され、軒数が大幅に減少しています。ただ、戦後一時期軒数が増えたものの、なにわ筋の開通などもあって 3 軒ほどが廃業、昭和 35 年ごろから 5 軒に、そして現在は 3 軒だけが営業を続けています。

西成のレンダリング産業は、精肉業者やハム工場からでる骨の処理が大きなウエイトを占め、屠殺解体の延長線上に位置づけられ、稼業として継承されてきた経緯があります。その一番の課題は化製場から出る“臭い”「骨」処理の工程で出される「悪臭」公害は、地域住民を悩ませるとともに、「西成地区は臭い」という部落差別意識を助長、再生産する大きな原因にもなっていました。

西成のレンダリング産業は、現在では精肉業者やハム工場からでる骨の処理が大きなウエイトを占めており、食肉産業の廃棄物処理を担う役割を持つものとして、清掃業の範囲に入れられるべきものと考えられますが、実際は屠殺解体の延長線上に位置づけられ、稼業として継承されてきた経緯があります。

西成レンダリング産業の一番の課題は、化製場から出る“臭い”の対策です。昭和 30 年頃から問題になり始め、個々の企業ごとに脱臭装置をつけるなど、それぞれ工夫改善を施してきましたが、1 社単位の努力では完全な臭いの対策には至らなかった。その間、化製場の移転も検討されましたが、移転先が決まらず、また反対意見も出て結局は実現されませんでした。「骨」処理の工程で出される「悪臭」公害は、地域住民を悩ませるとともに、「西成地区は臭い」という部落差別意識を助長、再生産する大きな原因にもなっていました。2 番目の課題は原料の確保、原料の確保が難しくなれば、今までの肥料やにかわなどの製造から転換し、新しい発想のもとによる付加価値の高い製品の生産を考えていく必要があります。そして労働力の問題です。良い人材を得るためにも、レンダリング産業を魅力的な産業にしていく必要がありました。

西成地区街づくり委員会は、悪臭公害という差別助長という事態の改善への取り組みとともに、レンダリング産業の持つ「公益性」に最大限注目し、「公設置、民営」方式を打ち出し、国や大阪府・市の理解と協力のもと、レンダリング業者の協業化による産業集約化の道を選択しました。

レンダリングが公益性のある地場産業であるといことを大事にしつつ、悪臭公害という差別助長という事態の改善への取り組みを、企業と行政に対して粘り強く展開してきました。1993 年 10 月 7 日付けで、大阪レンダリング事業協同組合加盟 6 業者の連名により、「無公害、食品指向事業への転換による集約化事業を推進」したいので、助

カしてほしいという『嘆願書』が西成地区総合計画委員会宛てに提出されました。西成地区総合計画委員会ではレンタルリング産業の持つ「公益性」に最大限注目し、屠場や魚市場の手法を参考にしながら、「公設置、民営」方式を打ち出し、国や大阪府・市の理解と協力を取り付けるなか、レンタルリング業者の協業化による産業集約化の道を選択しました。

図. 化製場集約化による畜産副生物処理工場

ブルー・グリーンが目を引き、地域のシンボルタワーとなっています。



---

出典：西成で骨を考えた-西成のまちづくりとレンタルリング産業-

発行日：1998年11月25日

編者：西成区街づくり委員会 代表 松岡徹

：焼土の街から-西成の部落解放運動史-

発行日：1993年2月28日

発行：部落解放同盟西成支部

：一変身、5年の軌跡-西成の部落解放運動

発行日：1998年7月15日

発行：部落解放同盟西成支部